

強豪国との比較

項目	国名																								ロンドンに向けての日本の対応と具体案		
	日本		イギリス		オーストラリア		フランス		ブラジル		スペイン		アメリカ		中国		オランダ		ユーロ圏		イタリア		ドイツ			ホランド	
北京オリンピック成績	入賞1		金4、銀1、銅1、入賞3		金2、銀1、入賞3		銀1、銅2、入賞4		銀1、銅1、入賞2		金1、銀1、入賞2		金1、銀1、入賞2		金1、銀1、入賞2		銀2、入賞2		金1、入賞3		銀1、銅1、入賞4		銅1入賞3		入賞3		具体案
参加種目数、人数	6	9	11	18	10	17	11	18	8	12	10	16	11	18	11	18	7	12	7	9	11	18	6	12	5	8	少数精鋭で挑むか？取得権利獲得の幅広い範囲で参加するか？ID取得を考慮すると参加幅を広げることが有効
達成割合・コメントNo	達成割合	No	達成割合	No	達成割合	No	達成割合	No	達成割合	No	達成割合	No	達成割合	No	達成割合	No	達成割合	No	達成割合	No	達成割合	No	達成割合	No	達成割合	No	
1. オリンピックに向けた準備(期間、特徴)	○	1	◎	2	○	3	○	4	△		◎	5	◎	6	◎		○	7	○	8	○	9	△	10	○		・2009年3月まで現スタッフが継続、現状組織・スタッフで4年間の強化方針(案)を策定。 ・現地英国(ウェマス)とのコネクションを模索 ・年度ごとの評価表を作成し、達成率を確認
2. スタッフの役割が明確(人数、ID数、特徴)	△	11	◎	12	○	13	○	14	○	15	◎		◎	16	◎		△	17	△	18	○	19	△		○	30	・日本はAD数に制限あり、強豪国と同じ数の取得は不可能 ・スタッフの役割を明確にし、責任所在を明確にする。 ・コーチの専門性、必要能力の向上(五輪では1人2〜3役)
3. 組織力(まとめ、リーダーシップ)	△	21	◎	22	○	23	◎	24	○	25	◎	26	◎	27	◎	28	△	29	△	30	△		△		○	31	・五輪監督、コーチ陣の要となる人選は、プレ五輪前に決定 ・監督が候補選手のコンディション、技術、パフォーマンスを確認 ・プライベートコーチとのコミュニケーション作りを推進
4. 目標設定(技術面、青島対策)	△	32	◎	33	◎	34	○	35	◎		◎		◎		◎		◎	36	◎		○		○		○		・国内、海外選手の総合的技術力の把握及び海外遠征大会でのレベル変化(年間)を把握 ・気象観測データ(英国)の情報収集と風域の把握 ・セイル、スパー類、ボート&ギア類の開発(特にセイル情報)
5. 情報戦(気象、ルール、他国分析)	△	37	○	38	○	39	△	40	△	41	○	42	◎	43	△	44	△	45	○	46	○		△		△		・JOC情報戦略担当者が情報を関係者へ配信、統一認識を持つ(海外情報収集力の欠如) ・他国選手、強豪国の五輪に対する対策等の情報収集
6. 選手(連続出場、本命選手のメダルレース参加状況)	△	47	○	48	△	49	△	50	○	51	○	52	○	53	○	54	○	55	△	56	○	57	○	58	△	59	・メダルレースの戦い方分析(一発勝負) ・メンタル(精神)面と戦術面の意思統一 ・接近戦、ハンドリングと敏捷性強化(練習最後に実施)
7. 資金面(規模、スタッフ、選手への補助)	△	60	◎	61	○	62	◎	63	○	64	◎	65	◎	66	◎	67	○	68	△	69	◎	70	○	71	△	72	・限られた資金、補助金を有効に活動継続 ・ランキングシステムを従来通り活用した補助金ランク分けを実施 ・JOC有給コーチの人選見直しと責任所在の明確化(業務遂行、成績等の入替)
8. 代表選考(時期、選考後)	△	73	○	74	△	75	○	76	○	77	○	78	△	79	△	80	○	81	○	82	○	83	△	84	○	85	・国内代表選考(国内基準の決定)の早期決定 ・強豪相手が複数存在クラスは、複数選考を採用 ・ワールドランキングでの選抜
9. メンタル(初参加、男子、女子)	△	86	△	87	○	88	△	89	○	90	△	91	△	92	○	93	○	94	△	95	△	96	△		○		・他種目女子アスリートのメンタル強化策のヒアリング ・英国式システム(GIRLS 4 GOLD)の活用 ・技術以外の能力向上トレーニングの実施(体力、知力、競技力向上)
10. 2012年の可能性	△	97	◎	98	△	99	◎	100	○	101	△	102	△	103	○	104	△	105	○	106	△	107	△	108	△	109	

注1. 数字の番号1〜109は、別紙コメントの番号を意味します。

注2、△ ○ ◎ の基準

△ 今後の検討が必要

○ ほぼ問題ない状況

◎ メダル獲得が可能な体制

項目別、国別詳細内容

	No	国	詳細内容
1. オリンピックに向けた準備(期間、特徴)	1	日本	2005年秋に最初の現地調査。2006年テストイベントは期間中のみ。2007年プレ五輪前に気象調査と合宿、2008年に事前合宿と気象調査。準備は他国よりも遅れており、2007年は50%の完成度、2008年にやっと間に合った。宿舍の準備は年ごとによくなった。強豪国よりも準備は1年サイクル遅れていた。2008年は青島日本人会の支援をうけた。2007、2008年はハイチンアパートを利用した。
	2	イギリス	シドニー、アテネと同じ準備で、青島の環境も2004年から調べて準備をしていた。最初から全体プランの構図を描き、本番までの計画をたてられる経験を持った国の強みがあった。ベースになるプランがあり、それを年ごとに改良する仕組みをもっている。中国という欧米人にとって難しい環境を、練習マリーナとオリンピックマリーナの両方を利用しやすい場所のシービューガーデンホテルに4年計画で契約条件を提示するなど、ビジョンをもった準備ができていた。ホテルの一部施設を貸切にし、レストランも貸切で専任シェフを英国から連れてきた。2008年はホテル滞在と選手村滞在とで分かれたが、チームのベースはホテルにおいた。レンタカーバスを効率よく運用していた。英海軍が青島に入港する機会もあり、海軍とのつながりもあった。8月3日から5日はチームで上海へリフレッシュ合宿(取材なし)へでかけ、その間に計測があったチームはコーチやボート担当者が計測を行った。
	3	オーストラリア	アテネでの失敗から分析をし、準備の専任者を置いた。イギリスを意識して、長期準備を心掛け、中国遠征を頻繁に行った。470クラスは中国とのつながりを強く持ち、強化練習などを行うかたわら、自チームの現地準備を行った。常にハイチンホテルをベースにした。
	4	フランス	フランスは他の国と離れて、独自の道を進むことを好むため、グランドリージェンシーホテルをベースに準備をした。2006年からレースだけでなく、青島での合宿を個々のクラスで計画するようにし、テストイベントやプレ五輪の前後を利用して長期滞在した。レンタカーバスを効率よく運用していた。
	5	スペイン	アテネへの準備と同じ。少数精鋭で、小規模。シービューガーデンをベース。必要なものは整っている。
	6	アメリカ	シービューガーデンベース。イギリスの次に物流面で長期計画をもっていた。ヨーロッパと中国と自国の3か所を考えるため、米軍の施設も利用していた。
	7	オランダ	2007年はテストイベントの前後に長期合宿(3週間)を青島で行った。2008年は6月から現地練習を行った。居住コンテナを用意しなかった。宿泊は特に長期契約せず、ハイチンアパートを利用した。7月10日から2週間で完全休養とし、オランダでも取材など一切行わない期間を設けた。
	8	ニュージーランド	4年間を通じて日本と準備のペースがよく似ていた。2007年、2008年の合宿期間も前後2-3日はずれがあったが、同期間で行っていた。離れたエストリルホテルを宿舍に利用していた。
	9	イタリア	2007年のテストイベントにコンテナが間に合わなかった。2008年は予備艇まで含めて大量に貨物を輸送していた。クラウンプラザホテルをベースに宿泊していた。
	10	ドイツ	クラウンプラザホテルをベースに宿泊していた。2008年は6月、7月中旬から後半にかけて長期合宿を現地で行い、本番が始まる直前はほとんど青島で練習していなかった。
2. スタッフの役割が明確(人数、ID数、特徴)	11	日本	仕事量に対して、語学の問題もあるが、1部スタッフに仕事が集中した。プロテスト、ボート修理は専任者なし。ゲストバスをうまく利用できなかった。スタッフ決定が遅く、五輪本番中の役割分担は詳細までつめられなかった。
	12	イギリス	14名のID所持者(クラスコーチ11名、チームリーダー、マネージャー、ヘッドコーチ)が中に入り、明確な役割分担をもち、コーチ陣が横の連携を強くもっていた。担当コーチは2役以上の分担をもっていた。11種目にコーチがつき、全クラスにコーチボートがあった。村外スタッフと合わせてセーリングチームは合計40名。その他にメディア対応、2012年スタッフなどがいた。ボート修理、ルール担当はコーチの中で兼任。トレーナーは村外。
	13	オーストラリア	10種目中、470男女が1コーチで対応したので、9名コーチ、総務、ロジスティクスがIDをとっていた。アテネ以降、ナショナルコーチのしきみを作り、優秀な人材をリクルートした。コーチの中に気象担当がいたが、気象担当者は村外で対応。トレーナーはゲストバスで対応していた。
	14	フランス	ナショナルコーチで編成。気象、潮流の担当者としてトレーナーが村外で対応。準備をするスタッフとコーチとでIDカードトランスファーを2名行った。
	15	ブラジル	どの五輪にもボート修理担当者が必ずいる。スタッフが足りなくなる日はチームリーダーまで含めて全員で対応していた。
	16	アメリカ	ナショナルコーチで編成。ルール担当者(デイブ・ペリー)がいた。
	17	オランダ	ナショナルコーチとプライベートコーチがいた。トルネードは元オーストラリア人にアメリカ人コーチがついていた。
	18	ニュージーランド	各種目にコーチがついていたが、すべての雑務をコーチが手分けして兼任してこなしていた。レーザーとラジアルが1艇のコーチボートできつそうだった。
	19	イタリア	種目によって2艇種をサポートしていた。チームリーダーはルーティンから外れていた。ボート修理担当者が専任でIDをとり中にいた。
	20	ポルトガル	ナショナルコーチは3名、残りは選手が補助金で雇っているコーチ。8名、5種目の選手に対して6名のスタッフがいた。ポルトガルや、ポーランドはそれぞれの国のオリンピックコミッティーにスタッフ枠を増やしてもらっていた。

3. 組織力(まとめ、リーダーシップ)	21	日本	6月に監督ほかスタッフが決定。まとめりはあったが、それが力になり結果につながったのは1部選手だけ。気を使ったり遠慮することでまとめりを形にしていた部分がある。
	22	イギリス	大所帯だが、スティーブ・パークスがリーダーシップをもち、3回目のチームリーダーを見事にこなした。6種目でメダル獲得しているが、本命以外のクラスでは英国を背負うことが負担に感じているという。
	23	オーストラリア	ビクター・コバレンコがアテネで失敗したチーム編成を立て直した。軸がしっかりしたので、これまでのようにクラスごとにバラバラになる気配がなかった。次回につながるスタッフの確保と育成という点は大成功だった。
	24	フランス	3名のスタッフ为中心となり、フランス各地にあるトレーニングセンターの中からナショナルコーチを選出したせいも、まとめりがあった。ナショナルコーチの中からリーダーシップがとれる人が次は全体をまとめる役割へとコンバートされていくので、オリンピックサポートの経験が豊富であり、伝統がうけつがれている。スタッフは全員がフェデレーション勤務。
	25	ブラジル	3名のスタッフ为中心。選手がかわっても、スタッフは前回の経験者と新しいメンバーで成り立っており、選手のもっている力を100%出せるような体制をとれていた。
	26	スペイン	アレハンドロ・アバスカルがチームリーダー。複数回参加している選手達をわがままにさせずに、うまくまとめていた。
	27	アメリカ	ギャリー・ボディーとルーサー・カーペンターが軸で、全体を回していた。個々のチームでの努力にたよる部分が多い。
	28	中国	エースがいる種目とそうでない種目とでバラバラだった。チーム内でも他のクラスは関係ないという風だった。
	29	オランダ	まとめりがあるのは各クラスの活動で、全体はまとめりが少なかった。軸になったのはジャコ・クップスで、コーチ陣と連携をとりばらばらな選手達をまとめていた。
	30	ニュージーランド	ロッド・デイビスがチームリーダー。よくまとめ、新旧選手達がそれぞれのいいところを出せるようにしていた。
	31	ポルトガル	ルイス・ロハがチームリーダー。男子選手とそのコーチだけの団体であり、選手もコーチも給料をもらって雇われている者ばかり。そのせいも、まとめりはあるが、最後の押しが足りないような雰囲気をもっていた。
4. 目標設定(技術面、青島対策)	32	日本	軽風、強い潮流を意識してプランを考えた。メダルをとった国と比較すると、全クラスに徹底できなかつたし、進歩の状況をチェックできていなかった。
	33	イギリス	連覇を狙った選手達は綿密なプログラムを作っていた。特にセール開発は青島ではなく、スペインのマヨルカで行った。アテネの時と比較すると現地練習は6月から9月前半に限らなければコンディションが合わないため、回数は減り、1回の日数を増やした。その合宿のたびに目標が設定されており、成果をチェックしていた。初出場のチームはコーチ陣と相談して準備をした。体重調整、セールの開発、軽風での潮の影響は繰り返しレースを行うことでマスターした。
	34	オーストラリア	軽風、潮、ルールをマスター項目とした。その技術が向上する練習プログラムをたて、100%実施するコーチを各クラスにつけた。49erとレーザーはワールドチャンピオンがいたものの、軽風対策が間に合わなかつた。470、イングリッド、トルネードはセール開発に時間をかけた。
	35	フランス	軽風のスピード、潮、ストラテジー、ダウンウインドに重点をおき、セール開発に時間をかけた。青島では1艇でもマークを回ることを心掛けた。女子はクルー交代で軽風用に考えたが、うまくいかなかつた。
	36	オランダ	470女子とイングリッドは軽風対策のために青島で練習する時間を多くとり、テストしたセールでの実際の走りをコース練習でチェックすることを繰り返した。動作練習でも改善できる点をすべて改善した。
5. 情報戦(気象、ルール、他国分析)	37	日本	JISSのサイトに青島の気象データを自動で保存するシステムを構築。現地の実測値をもとに2006年、2007年と事前調査を行い、2008年7月に最終調査。ルールは英語に中心をおいたが、ルールそのものの理解度が足りなかつた。他国分析は全くしておらず、470のセールについてノースセールから少しだけ話を聞いた。
	38	イギリス	気象についてはシドニーとアテネで構築したシステムをそのまま継続。潮流については2004年から調査を始めて、2007年までにはほぼ完了。ルールアドバイザーは村外で対応。IDスタッフにルールに詳しいコーチが2-3名いた。各国の代表選手の2007年、2008年のグレード1、2以上の大会と世界選手権の成績から実力を評価。
	39	オーストラリア	気象、潮流の調査は2007年から。ルールは専任者ではなく、コーチが対応。他国分析は特にしていないが、選手がライバルと思っているチームについてはコーチがレガッタでの様子を見るようにしていた。他国のセールの写真を多く撮影していた。
	40	フランス	気象は予報担当者が村外で対応。潮流は2008年に専門家が7月に調査を行った。ルールはコーチ陣が対応。他国のセールの写真を撮影した。
	41	ブラジル	コーチが潮、気象情報を担当。選手が他国から得る情報もチーム内で利用する。大会のデータでほぼ対応していた。
	42	スペイン	気象、潮流情報は大会のものを使った。得た情報を選手とコーチが使える情報にしている。他国のことは気にしていない。
	43	アメリカ	潮流については2006年、2007年に現地調査で簡単な転流のチャートを作成。ルールは専門家を入り、ルール以外にもヨットレースをコーチできる人選を、他国の分析は特に行わなかつた。
	44	中国	データよりも現場でセーリングして慣れることを重視していた。大会に情報を出している気象担当者からデータももらった。
	45	オランダ	オランダにいる気象担当者から毎日データをメールで送ってもらっていた。大会データと合わせて潮汐時刻を中心にエリア内での特長を整理していた。ルールはコーチで対応。他国分析は470女子、イングリッドは競り合う国の成績、得意、不得意をチェックしていた。
	46	ニュージーランド	大会の情報以外にニュージーランドからメールで気象情報を入手していた。潮データは大会のもので対応。自国選手が少ないので、外国勢との練習が多かつたので、選手から海外の情報を得ることも多かつた。

6. 選手(連続出場、本命選手の枝るレース参加状況)	47	日本	全員初出場。470女子がメダル候補でメダルレースに進出できなかった。
	48	イギリス	フィン、イングリッドは連覇。スターはフィンからの転向で2回目の金。RSX女子は初出場で銅。全種目が10位以内に入った。総合力はNO. 1であるが、銅がとれそうで4位のRSX男子とランク1位の49erが9位は期待を裏切った。
	49	オーストラリア	連続メダルはトルネード。470は復活。49er、RSX女子、ラジアルは4位か5位でメダルを逃した。ワールドチャンピオンのレーザーは22位に終わった。
	50	フランス	メダル候補の470女子、RSX女子はともに11位。全種目が11位以内。
	51	ブラジル	スーパースターのシェイドが銀、2回目の470女子が銅、RSX男子と49erが入賞。
	52	スペイン	49erとトルネードは期待どおり。RSX女子は軽風ではメダルとれず。ベテランが不調に終わった。
	53	アメリカ	ラジアルとフィンでメダルをとったものの、チーム全般は不調。各チームでの努力は限界。
	54	中国	狙った種目はラジアルとRSX男女、うち金1、銅1は目標達成。。他は強化を間に合わせる段階だった。
	55	オランダ	イングリッドと470女子、470男子でメダルを狙い、2種目で銀。トルネードも狙っていた。470女子は初出場で銀。RSX男子は強風セーラーで、ワールドチャンピオン。青島は不向きだった。
	56	ニュージーランド	RSX男子は本命で金。全種目で8位以内を狙っていたが、一般的に予想よりもやや低迷。12位以内に全種目が入っている。
	57	イタリア	アテネよりもあがった種目は470男女、49er、レーザー、RSX女子。
58	ドイツ	49erは初出場で銅メダル。他は10位以内に入ったが、ラジアル女子だけメダル候補にあがりながらも15位に終わった。	
59	ポルトガル	5種目出て、うち3種目が入賞、全種目が11位以内。国際レースで上位に入るチームしか五輪本番に出さないというポリシー。レーザーは僅差でメダルを逃した。RSX男子は富沢に逆転されてメダルレースに残れなかった。	
7. 資金面(規模、スタッフ、選手への補助)	4	日本	遠征補助、チーム補助あり。若干のスタッフはJOCコーチ補助金支給。他はボランティアまたは企業チームコーチ。
	61	イギリス	スカンジアがスポンサーにつき、チーム全体にスポンサーしている。ロンドン五輪強化でスタッフが専属で雇われている。予算、経費が組織で管理されている。国、スポンサーの両方。協会を通して選手個人の活動用にスポンサーをつけているため、予選で勝った選手には必ずスポンサーが見つかるしくみになっている。選手への補助はレースの成績で補助金額の割合が決まる。雇用されているスタッフは、適正能力が足りないと解雇される。
	62	オーストラリア	国が雇うナショナルコーチ、協会が雇う地域コーチと事務スタッフなど、役割と雇用が明確になっている。雇用されているスタッフは適正能力が足りないと解雇される。遠征はトップアスリートになると個人負担がなく、チーム枠外の選手は自費。
	63	フランス	スタッフは公務員。フランス協会、各地のセーリングスクールの指導者になっている。コーチ指導コースを勉強した者が就職するが、五輪コーチには五輪経験者でしかもコース修了者、現場でのつみあげがあった指導者があがってくる。予算、補助金は組織内で管理され、スポンサーは協会がオリンピックチームにつけるしくみ。トップアスリートにチームスポンサーをつけて活動費を補助する。ボートは自費だったり、地域でスポンサーをつけて選手を支援する。
	64	ブラジル	国の補助金、ヨットクラブの補助、個人スポンサー、自費で活動費をまかなう。ヨットクラブで雇うコーチ、選手が個別に雇うコーチ、国の補助でセーリング連盟が雇うコーチがいる。
	65	スペイン	国の補助で専任スタッフを雇う。人数は多くないが、ソウル五輪から中心メンバーが少しずつ入れ替わりながらも継続している。
	66	アメリカ	US連盟で雇っているのは3名、他はヨットクラブや短期で雇われる。ボランティアスタッフもいる。遠征は補助金でまかない、選手は個々にスポンサーや地元ヨットクラブの支援を受ける。裕福な家庭の選手が多いのは代表になるまでに自費でまかなうことが多いため。
	67	中国	地元開催だから、例外な資金が入っている。国と企業のスポンサー。選手もスタッフも雇用されている。
	68	オランダ	協会が短期で雇うスタッフが選手を指導している。スポンサー、国からの補助金、ヨットクラブ、寄付で選手の活動をまかなう。活動はできるが、収入はなく、補助金からトレーニング費や生活費がでている。
	69	ニュージーランド	世界選手権で上位に入るとコーチを雇う費用を基金から出してもらえる。協会はフルタイムとパートタイムでスタッフを雇い、3名程度が雇用されている。今回は上位に入った選手が数多くいたことから、コーチを雇うことができた。遠征は国からの補助金と企業スポンサーからの支援にたよっている。学生選手は親の支援、社会人選手は練習の合間に仕事をしている。
	70	イタリア	しくみがよくわからないが、国から雇用されているコーチが数名、ヨットクラブが選手のために雇っているコーチが数名、強化選手は補助金をもらってトレーニングする。レーザーの銅メダル選手は元アルゼンチンの選手で、将来の指導者としてイタリアへ国がえした。
	71	ドイツ	コーチは雇用されているが、給料は年間200万円くらいの計算になる。選手は補助金で活動する。
	72	ポルトガル	世界選手権で好成績を出した選手には国から補助金がでる。連盟スタッフは3名がフルタイムで雇用されている。パートタイムのコーチは選手が個別に雇っている。

8. 代表選考(時期、選考後)	73	日本	各クラスの2008年世界選手権。470はポイント制。枠がとれていなかったクラスは枠をとった選手。RSXは世界選手権の最上位。国内代表選考会は、各クラス協会で決定。470クラスは、青島気象に合わせ軽風域(広島)で実施
	74	イギリス	選考委員がいて、2007年世界選手権、ヨーロッパ選手権、プレ五輪の成績から代表を決める。選考が終了するクラスにはそのむねを、きまった時に伝える。あとの大会へ持ち越しになったクラスはどの大会までと指定されるが、フィンのように指定大会よりも早い時期に決定したケースもあった。470男子は2006年、2008年のワールドチャンピオンがいたが、選考委員はロジャース組を選び、安定した成績と確実性を評価した。
	75	オーストラリア	選考委員がいて、指定大会の成績から決定した。ほとんどの種目は代表争いが少なかったが、470男子はプレ五輪での優勝で決定した。
	76	フランス	選考委員がいて、選考委員の意思で決めていたため、選手はいつが選考の最後かがわからなかった。ポイント制ではなく、3名の選考委員が各大会の風の状況や選手の特徴を見て決めた。
	77	ブラジル	国内で代表選考レースを行い、決定した。470はそのために2008年世界選手権に出ることができなかった。
	78	スペイン	ほとんどの種目が2008年プリンセスソフィア杯までの指定大会での成績で決定した。
	79	アメリカ	国内選考で決めた。枠がとれていなかった種目も代表は決めた。470女子はそのあと、代表選手でないチームが2008年ワールドチャンピオンになり、選考の意味を問われていた。
	80	中国	ほとんどの種目が国内選考で数をしぼり、2008年世界選手権と春のヨーロッパ遠征での指定大会で代表を決めた。成績をポイントにしないで、クラスコーチが最終決定した。
	81	オランダ	各クラスにエースが存在していたため、レーザ一級以外は2007年世界選手権で決めた。そこで枠がとれなかった種目は五輪に参加していない。
	82	ニュージーランド	枠をとった種目でも、国別8位以内に入らない種目は参加していない。エースの存在で国内の争いがほとんどない。選考委員が3名いて、種目ごとに設定した国際基準を突破することが代表選考になっていた。
	83	イタリア	代表選考する大会は決められていたが、その大会がすぎても、国際基準が突破できないクラスは派遣しない意向を持っていた。艇の準備が少ないレーザ一、ラジアルは2008年5月のメデンブリックまで選考としたが、艇の準備が必要なクラスはおおむね2007年11月に代表を発表していた。
	84	ドイツ	2007年世界選手権で枠を獲得したクラスはその時点で代表を決めていた。2008年世界選手権まで枠がとれないクラスはそこまでかかったが、8カ国以内に入らなかった種目は枠がとれてもオリンピックに参加しなかった。
	85	ポルトガル	エースがフルタイムで活動しているため、2007年に枠がとれた時点で代表に決まった種目がほとんど。枠がとれて、しかも8位以内に入らないと参加しないため、女子は総崩れになった。
	9. メンタル(初参加、男子、女子)	86	日本
87		イギリス	大会前に上海へリフレッシュ合宿へ行った。シドニー五輪の際にはブリスベンへ出かけていたが、シドニー以降、同じ手法を取り入れている。選手によっては、リラックスしすぎの気配があった。
88		オーストラリア	メダル狙いの選手達が後半緊張していた。470はリラックスできていた。
89		フランス	470女子とRSX女子は本命選手が受けるプレッシャーで自滅した。他の種目は初出場が多かったにもかかわらず、厳しい選考を勝ち抜いただけの問題なく本番で力を発揮した。
90		ブラジル	ラテン系の勢いを感じるチームだった。シェイドの初日からの立ち直りとかメンタルの強さはチーム内で良い影響を与えていた。
91		スペイン	49erチームの粘りがチーム全体に良い影響をだしていた。女子のベテランは勢いがなかった。
92		アメリカ	470女子はプライベートコーチからチームコーチにかわり、おかしくなっていた。
93		中国	女子エース2名(RSXとラジアル)は非常にメンタルが強かった。あの冷静さは日本の女子選手が学ぶべきものだろう。8年の間に英語が上手になっていた。
94		オランダ	470女子はオリンピック以外の軽風の大会で苦労を重ねた結果、オリンピックへは危機感をもって入ってきた。1レースの結果でアップダウンせず、最後まで1つ1つのレースで失敗をしないことへの集中の持っていた。毎日と同じペースで過ごす方法、など、凡ミスをおかさないと心掛けていた。コーチが大学で心理学を専攻していたので、メンタル面はいろいろと研究して良い方法にトライしていた。
95		ニュージーランド	力のある選手が多かっただけに、上手にリラックスすることができなかった。前半のフィンが予想外に崩れた影響が、最後に始まったスターに伝染した。仲間意識の強い場合の切り替えの難さと、女子選手が後半疲れた顔に変化していたのが目立った。バーバラ・ケンドールがまじめに取り組みすぎていて、これまでのような勢いがなくなりだした。
96	イタリア	エース種目は出だしが悪くても後半に追い上げをする強いところがあった。スタッフに年配の人が多くと落ち着いた雰囲気があるが、元気がない印象もある。イタリア人は気性が激しいので、ちょうどいいのかもしれないが。	

10. 2012年の可能性	97	日本	470男女、RSX男女、49erは今後への可能性を見せた。東京が2016年の開催地になったら、強化方針を東京での選手育成にしなければならない。
	98	イギリス	全種目でメダルをとることを目標にできるのでは？今回のメンバーが抜けても、すでに次の若い世代が育成できている点がすごい。今回失敗した49erの切り替えは次回へむけての例になるため、他国よりも1歩先を行く。
	99	オーストラリア	アテネでの470の失敗は取り戻したが、他クラスでは僅差でメダルをとれなかった選手の後釜がない。次の世代の育成では遅れている。
	100	フランス	今回よりも次回のほうが狙っているのではないだろうか。470女子、RSX女子にも次世代が育ってきているので、打倒イギリスの筆頭にあがると思う。
	101	ブラジル	日本と同様に、リオが2016年の開催になるかどうか強化の決めてになりそうである。
	102	スペイン	スター選手の後釜がすでにできているクラスがある。今回は470男子で切り替えに成功しているので、次回は別種目でメダルを狙えるチームがでてくるだろう。
	103	アメリカ	バルセロナでは1種目を除いて、残りのすべてのクラスでメダルを獲得した。当時の選手が抜けた後、まとまりがなくなったままになっている。大きな方向転換がないと、今回と結果がかわらないだろう。
	104	中国	すでにロンドンを目指す活動が始まっている。同じ種目でメダルをとるために勢いがとまらない。
	105	オランダ	個人の努力によるし、優秀なスタッフが継続して指導する方向性がないようなので、どうなるのだろうか。
	106	ニュージーランド	今回は若い選手が多かったので、次回へ続くと驚異になるかもしれない。
	107	イタリア	優秀な選手、コーチを海外から高い費用を支払ってイタリア人として獲得している。このまま続くのであろうか？
	108	ドイツ	強いドイツが戻ってくる気配がない。同じ選手しかでてこないのは何故なのか。
109	ポルトガル	同じ選手がシドニーから連続していた。ロンドンへ向けては新しい選手の育成になるのではないか。種目をしぼってくるのではないか。	